

しょうかんそつびょうろんかん

傷寒卒病論葉（一）

秩父市 大友内科医院

大友 一夫

康平傷寒論について一序に代えてー

「吾聞く、前の代に良き^き医^い多く有り、蒼^{あお}生^{おひとくさ}の病患^{やまひ}を救療^いす。揄^ゆ附^ふ、扁^{へん}鵲^{じやく}、華^{くわ}他^た、秦^{しん}の和^わ、緩^{くわん}、葛^{かつ}稚^ち川^{せん}、陶^{たう}隱^{いん}居^こ、張^{ちやう}仲^{ちゆう}景^{けい}等^{とう}の若^{じやく}きに至^{いた}りては、皆^{みな}世^よに在^ありし良^きき^{くすし}医^いにして、除^{くすし}愈^いさずといふこと無しと」

これは『万葉集』巻第五「沈^{ちん}痾^あ自^じ哀^あの文」に寄せた山上憶良の言葉で、天平五年（733年）73歳のときに綴ったものである。憶良は壮年期、遣唐使として5年間唐で学んでいるので、中国の医学にも通じていたのであろう。晩年病に臥せてから、神仏を祈祷し、亀卜、巫祝にも頼ったが効果なく、嘆息しながら中国の名医に思いを致すのであった。その名医の中に、張仲景の名が登場するのである。

張仲景は後漢の医師で、建安10年（205年）頃に伝染病の画期的な治療書『傷寒論』を著している。日本では神功皇后の治政が始まったばかりの頃である。この書は仲景の死後わずか10年で戦乱のため散逸してしまったが、数十年後に王叔和^{おうしゅくわ}が収集して復刻している。その後、文献に『傷寒論』らしい名前が見られるのは、『隋書經籍志』（梁有、張仲景辨傷寒十卷、亡）と『新唐書・藝文志』（傷寒卒病論十卷）である。ここでははっきり「傷寒卒病論」とある。

宋の時代になると、林億らが傷寒論を校正し、治平2年（1065年）にこれを出版した。これが宋版傷寒論の原本であるが、現代には伝わっていない。明の時代になって、万暦27年（1599年）、趙開美が『仲景全書』を著し、その中に「（翻刻宋版）傷寒論」が収載されている。これが宋版傷寒論を今に伝える底本である。この本は一般には『趙開美本傷寒論』と呼ばれている。これとは別に金の成無己が宋版を元に、皇統4年（1144年）に黄帝内経的な解釈で『註解傷寒論』という注釈書を著している。また、唐代の作といわれる『金匱玉

函経』という傷寒論の異本もある。日本では江戸時代に数種の宋版傷寒論（以下宋本と略す）や成無己の註解傷寒論（成本と略す）が翻刻された。なお、嘉永2年（1849年）に丹波頼易がしたためた序文のある『康治本傷寒論』（康治本と略す）という書があるが、この傷寒論は比叡山の僧が唐から持ち帰ったものを康治2年（1142年）に書き写したものだという。

さて、昭和11年（1936年）初秋、大塚敬節氏は東京本郷の某書店で珍しい傷寒論の伝写本を発見した。『傷寒卒病論』と題するその本は、奥書に「康平三年二月十七日 侍医丹波雅忠」とある。康平3年（1060年）といえば、平安朝・後冷泉天皇の時代である。丹波雅忠（1021～1088）は永承7年（1052年）に後冷泉天皇の病を治したことで侍医に叙任されている。彼の著作として『医略抄』『医心方拾遺』などがあるが、これらは曾祖父・康頼の『医心方』（永観2年・984年）を抄録したものである。なお『医心方』にも、仲景の名や仲景方が散見される。この『傷寒卒病論』の伝写本は、書体などからずっと新しい時代に書き写された可能性はあるが、原本が1060年に刊行されたとするならば、宋改を経ていない傷寒論であり、『新唐書・藝文志』に載る「傷寒卒病論十卷」であったかもしれない。宋改以前の傷寒論がすでに日本に伝来し、その古態を伺えることになる。この書は空海（774～835）によって齎されたとする説もある。

大塚氏はこの傷寒卒病論を『康平傷寒論』と名付け、「康平本」と略称した。その後大塚氏は同様の伝写本三部（その内二部は和気氏古本傷寒論と称したが、内容は全く同じであるという）を手に入れているが、一部を南京の葉橘泉氏に、一部をドイツ・フランクフルト大学教授の Otto Karow 氏（大同類聚方の研究で学位を得る）に贈呈している。後述するように、中国の冉雪峰^{ぜんせつぽう}氏もこのルートで康平本を目にしたのであろうか、『冉註傷寒

論』（1981年）では康平本を高く評価している。
現在、中国や台湾の傷寒論研究者の間でも、康平本を正しく取り上げている論文もある。

それでは康平本の体裁を簡単に説明してみよう。

まず図1のごとく、宋本との違いが如実に現れている太陰病の一部を取り上げてみる。

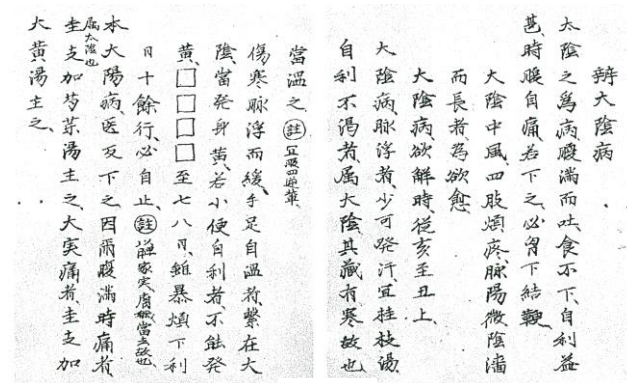


図1

一見して、文章に段がついているのがお判りかと思う。一行の字数が、十五字詰め、十四字詰め、十三字詰めに分けられている。また註や、文章の右側に傍註も見られる。これらの註も含め、内容はほとんど宋本と変わりはない。ただ宋本では、このような区別はなく、単に並列的に記述されているに過ぎない。大塚氏は、十五字詰めが最も古い経文であり、十四字詰め、十三字詰め、註というように、後人が追論を増補したのであろうと推測している。また、ここでは四文字分、四角で囲った欠字が見られる。

古来、我が国においてはもとより、中国の傷寒論研究者でさえ、傷寒論がことごとく張仲景の作であると思っていたわけではない。そもそも「宋本」の中に“仲景舊論”とか“仲景の意に非ず”とあるのを見れば、後人の追論がどこかに挿入されていると想像するのは当然のことである。その想像の域を出なかった部分が、「康平本」では整然と区別されていたのである。

それでは、註や十三字、十四字詰めにあって、十五字詰めにはない章句をいくつか挙げてみよう。

- ◎・今搜採仲景舊論・疑非仲景意（方）
- ◎撰用素問九卷八十一難陰陽大論胎臚藥錄并平脉

辨證

◎問曰

◎・経脈・伝経・過経・榮・衛・〇〇病欲解時…

◎・寸・関・尺・趺陽脉

◎・期門・大椎・肺俞・肝俞

◎・脾・腎・肺・肝・上焦・中焦・血室・陰器

傷寒論序文において素問や八十一難を参照にしたという部分は、康平本では註になっている。また康平本十五字詰めには「問うて曰く」という問答形式はない。これは傷寒論解釈における後人の師弟の問答であると見なすことができる。さらに、『素問』熱論に見るように、邪気とか営気衛気が経脈を伝経する有り様は十五字詰めからは伺えず、太陽病などが治る時刻まで記載されている部分は、康平本では十三字詰めになっている。康平本十五字詰めでは表裏の病態を推し量る脈は、寸口脈一本である。趺陽脈は十三字詰めでは登場する。『内経』で重要な脈である人迎脈は、どの傷寒論本文にも見当たらない。康平本十五字詰めでは、寸口上に陽脈と陰脈を規定し、おそらく寸を陽脈、尺を陰脈としている。「寸」「尺」の語は十四字詰め（「関」は十三字詰め）で登場し、十五字詰めにはない。また期門、大椎、肺俞、肝俞などのツボの名前もない。さらに十五字詰めでは登場する五臓は、唯一「心」のみである。十五字詰めでは六腑は、「胃」「膀胱」「下焦」であり、「胆」「小腸」「大腸」「心包」は傷寒論全文を通読しても見いだすことができない。

追い追い当「栞」で『傷寒論』と『黄帝内経』の違いを詳述するつもりであるが、間接的にはともかく、十五字詰めでは『黄帝内経』の句いを嗅ぎ付けることはできないのである。

次に康平本では、四角で囲った欠字が、時々見受けられる。宋本ではここに適当な文字が入っていたり、多くは省略している。以下にその箇所をいくつか抽出し、宋本と比較してみよう。

◎康平本：委付□醫

宋 本：委付凡醫

◎康平本：此必両□聾無聞也

宋 本：此必両耳聾無聞也

◎康平本：冬氣□洌

宋 本：冬氣冰洌

◎康平本：秋必病□

宋 本：秋必病瘡

◎康平本：傷寒發熱汗出不解心中痞鞭嘔吐而下利者□□□□之

宋 本：傷寒發熱汗出不解心中痞鞭嘔吐而下利者大柴胡湯主之

康平本では凡医の凡、両耳の耳、冰洌の冰、病瘡の瘡の文字が欠字になっている。宋本に詳しい人ならば、当然書き入れたくなる箇所である。おそらく意図的に省略したというよりも、虫食いや汚れではっきりしなかったために、書き写した人が欠字として残したのであろう。伝写の伝写としての使命を全うしている姿勢が伺われる。なお最後の文章で「大柴胡湯主」の部分は4文字欠字となっており、「大柴胡湯主」では字余りになってしまう。別の三文字の処方に行く可能性も否定できない。

さて、筆者が初めて傷寒論に取り組んだ時の教本は宋本であった。学んで行くうちにいくつかの疑問点に逢着した。今はその一つ白虎湯をとりあげてみよう。

宋本の厥陰病における白虎湯の条文は「傷寒脉滑而厥者、裏有熱白虎湯主之」である。ところが太陽病の条文では「傷寒脉浮滑此表有熱裏有寒白虎湯主之」とあり、「裏有寒」となっている。これは明らかな矛盾である。滑脉は裏に熱あることを示しているので、誤った記載である。そこで成本、康治本を調べてみると、宋本と同様、厥陰病では「裏有熱」としながら、太陽病ではやはり「裏有寒」と齟齬が見られる。『千金翼方』（元版）でも「裏有寒」である。宋改を経た傷寒論では皆この過ちを踏襲している。面白いことに、『金匱玉函經』では、この部分は「傷寒脉浮滑而表熱裏寒者白通湯主之舊云白通湯一云白虎者恐非」次いで小さな文字で「舊云以下出叔和」とある。裏寒に白虎湯ではおかしい。一字違いの白通湯であろうと訂正したのである。ただ白通湯は脉微であるので、これも間違いである。ここで康平本をひもとくと、厥陰病の条文では「傷寒脉滑而厥者裏有熱也白虎

湯主之」とあるが、太陽病の条文では「傷寒脉浮滑白虎湯主之」とあるのみで、「裏有寒」の文言はない。

これに気づいてから、宋本と康平本を比較検討して行くと、宋本の過ちが次々と露呈されて来たのである。さらに臨床に照らし合わせてみると、いくつかの新しい発見もあった。

そこで満を持して、原始傷寒論とも目すべき十五字詰め¹⁾の章句のみを取り上げ、ここに『傷寒卒病論葉』（略称“葉”²⁾または“論葉”³⁾）を上梓することにした。傷寒論を学習する者にとって、道しるべとなれば幸いである。

傷寒卒病論¹⁾

【文】

余每覽越人入號之診、望齊侯之色、未嘗不慨然歎其才秀也、怪當今居世之士、曾不留神醫藥、精究方術、上以療君親之疾、下以救貧賤之厄、中以保身長全、以養其生、但競逐榮勢、企踵權豪、孜孜汲汲、惟名利是務、崇飾其末、忽棄其本、華其外、而悴其內、皮之不存、毛將安附焉、哀乎趨世之士、又馳競浮華、不固根本、卒然遭邪風之氣、嬰非常之疾、患及禍至、而方震慄、降志屈節、欽望巫祝、告窮歸天、束手受敗、賁百年之壽命、持至貴之重器、委付凡醫、而恣其所措、咄嗟嗚呼、厥身已斃、神明消滅、變為異物、幽潛重泉、徒為啼泣、痛夫、舉世昏迷、莫能覺悟、不惜其命、若是輕生、彼何榮勢之云哉、而進不能愛人知人、退不能愛身知己、遇災值禍、身居厄地、蒙々昧々、惓若遊魂、忘軀徇物、危若氷谷、至於是也、余宗族素多、向餘二百、建安紀年以來、猶未十稔、其死亡者三分有二、傷寒十居其七、感往昔之倫喪、傷橫夭之莫救、乃勤求古訓、博采衆方、為傷寒卒病論、雖未能盡愈諸病、庶可以見病知源、若能尋余所集、思過半矣。⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾

【訓】

余、越人號^{かく}に入るの診、齊侯^{せいこう}の色を望む^みを覽る

毎に、未だ嘗て概然として其の才の秀でたるを歎
ぜずんばあらざるなり。怪しむべし、當今居世の
士、曾て神を醫薬に留めて、方術を精究し、上は
以て君親の疾を療じ、下は以て貧賤の厄を救い、
中は以て保身長全し、以て其生を養うことをせず。
但、榮勢を競逐し、踵を權豪に企て、孜々汲々
として、惟名利是れ務む。其の末を崇飾し、其の
本を忽棄し、其の外を華にして、其の内を悴す。
皮之存せず、毛將安にか附かん。哀しいかな、趨世
の士、又浮華を馳競し、根本を固めず。卒然とし
て邪風の氣に遭い、非常の疾に嬰り、患及び禍至
りて、方て震慄し、志を降し節を屈して、巫祝
を欽望し、窮を告ぐれば天に歸し、手を束ねて敗
を受く。百年の壽命を賡り、至貴の重器を持って、
凡醫に委付し、其の措く所を恣にす。咄嗟嗚呼、
厥の身已に斃れ、神明消滅し、變じて異物と為り
て、重泉に幽潜して、徒に啼泣を為す。痛い
夫、世を擧げて昏迷し、能く覺悟すること莫く、
其の命を惜しまず。是の若く生を輕んずるに、彼
何ぞ榮勢之を云わんや。而も進んでは人を愛し人
を知ること能わず、退いては身を愛し己を知る
こと能わず。災に遇い、禍に値いて、身は厄地に
居り、蒙々昧々、惓として遊魂の若し。軀を忘れ、
物に徇い、危いこと氷谷の若くにして、是に至
れる也。余の宗族素と多くして、向に二百に餘る。
建安紀年以來、猶お未だ十稔ならざるに、其の死
亡する者、三分の有二、傷寒十其の七に居る。往昔
の倫喪に感じ、横夭の救莫きを傷む。乃ち勤て
古訓を求め、博く衆方を采り、傷寒卒病論を為す。
未だ盡く諸病を愈すこと能ずと雖も、庶わ
くは以て病を見て源を知る可し。若し能く余が集
むる所を尋ぬれば、思い半ばに過ぎん。

【注】

- 1) 宋本では「傷寒卒病論集」が表題となり、「余毎…」の前に「論曰」が入る。康平本では「余毎…」の横に「集論曰」が傍注としてある。
- 2) 越人：『史記』扁鵲倉公列伝には「扁鵲は渤海郡鄭の人なり、姓は秦氏、名は越人」とある。長桑君から透視能力を伝授された。

- 3) 入虢之診：扁鵲が虢の国を通りかかったとき、太子が死んだと告げられた。そこで請われて太子に鍼治療を施すと蘇生した。死人を生かしたと称賛されると、扁鵲は「能く死人を生かすに非ざるなり。此れ自ずから當に生くべき者にして、越人能く之をして起たしむるのみ」と答えたのであった。
- 4) 齊侯之色：扁鵲が齋の桓侯に謁見したとき、「君、疾あり、腠理に在り。治せずんば將に深からんとす」と治療を勧めたが、桓侯は一笑に付した。五日後に謁見したときには、疾は「血脈に在り」、さらに五日後には「腸胃の間に在り」と提言するも桓侯は聞き入れなかった。その五日後に望診した扁鵲はそのまま逃げ去った。疾は骨髓に達していたのだ。間もなく桓侯は死んだ。
- 5) 士：“士”の語源は男のシンボルという説と一から十まで備わっているという説がある。併せ考えると“一人前の男”となる。日本語の“ヒト”も“ひい”から“とお”まで備わっていることから名付けられたといわれている。転じて官僚、知識人、侍などを表すようになった。文脈から「当今居世之士」は知識人の中でも医者を目指し、「趨世之士」は、一般教養人を表していると解釈した。
- 6) 「哀乎趨世之士、又馳競浮華、不固根本」は宋本では「惓若遊魂」と「忘軀徇物」の間に入る。今、康平本を採る。
- 7) 委付凡醫：康平本では委付口醫とあり、凡は欠字となっている。
- 8) 建安：後漢献帝の頃の元号(196年～220年)。三国志で英雄豪傑が群雄割拠する時代である。日本では201年から神功皇后の時代。
- 9) 康平本ではこの後「撰用素問、九卷、八十一難、陰陽大論、胎臚藥錄、併平脉辨證」が嵌注として入るが、宋本では正文となっている。
- 10) 傷寒卒病論：宋本では「傷寒雜病論合十六卷」とある。
- 11) 卒病：“卒”字には大きく3つの意味がある。すなわち①雜役夫や兵卒などの衣（原義）→歩兵、しもべ、集まり②にはかに、慌ただし

い③終わる、尽きる、死ぬである。「卒病」を①の意味で考えるならば、「傷寒とそれに率いられる病」つまり「傷寒類聚」とも呼べる。雑役と兵卒に共通点があるように、雑病と卒病も同類と見なせる。したがって今風に傷寒卒病（雑病）論を訳すならば、「感染症論」となる。②では、同じ“にわか”でも、“俄”と違い、卒死、卒倒、卒中など、病で急に倒れる救急の意味合いが強い。つまり、傷寒卒病は「感染症並びに救急疾患」となる。③ならば、卒業の語もあるように、「病を終わらせる」とも受け取れ、傷寒卒病論は「傷寒治病論」となる。結論はしばらく措くが、筆者は今、大塚敬節氏と同様、①のイメージで捉えている。

- 12) 思過半矣：『易経』繫辭下伝にもこの語を見る。
13) 康平本ではこの後、以下の文言が 13 字詰めで綴られているが、宋本では引き続き正文として載る。

「夫天布五行、以運萬類、人稟五常、以有五藏、經絡府俞、陰陽會通、玄冥幽微、變化難極、自非才高識妙豈能探其理致哉、上古有神農黃帝岐伯伯高雷公少俞少師仲文、中世有長桑扁鵲、漢有公乘陽慶及倉公、下此以往、未之聞也、觀今之醫、不念思求經旨、以演其所知、各承家技、終始順舊、省疾問病、務有口給、相對斯須、便處湯藥、按寸不及尺、握手不及足、人迎趺陽、三部不參、動數發息、不滿五十、短期未知決診、九候曾無髣髴、明堂闕庭盡不見察、所謂窺管而已、夫欲視死別生、實為難矣、孔子云、生而知之者上、學則誨之、多聞博識、知之次也、余宿尚方術、請事斯語」

この中で、康平本の「終始順舊」は宋本では「始終順舊」、康平本の「務有口給」は宋本では「務在口給」に作る。

- 14) なお康平本の序文の最後（14 字詰めの傷寒例の前とも見なせるが）に、14 字詰めで以下の署名が載る。

「漢長沙守南陽張機著
晋大醫令王叔和撰次」

長沙は中国・湖南省の省都。長田徳本著『醫の辨』にある「法は越人長沙に求めよ」の長沙は張仲景を指している。

張機（150?～219）は、現在ではほぼ張仲景と特定されている。

晋は魏の後の中国の王朝（265～420）のひとつ。

王叔和（180～270）は晋代の医師。『脈経』を著すとともに張機の『傷寒論』を編纂している。

【訳】

扁鵲が虢の太子を蘇生させたり、斉の国の桓公を望診して一瞥のうちに病態を悟った故事を聞くにつけ、扁鵲の優れた才能に感嘆せざるをえない。残念なことに昨今の医者には医薬や治療を真摯に探求しているとは思えない。上は君主や両親の病を癒さず、下は貧賤の患いを救わず、自らは体に気をつけて養生することもしない。ただ栄華を競って追い求め、目を権勢にばかり向け、名誉や営利を得ようと汲々としている。末節ばかりを飾り立て、本分をおろそかにしているので、外は華やかに見えても、内はみすばらしい限りである。皮がなければ、どうして毛が付くことがあろうか。哀れなことだが、世間の教養ある人々も見栄えにこだわって根本をないがしろにしている。突然邪気に当たって病を患い重体になると初めて恐れおののき、意気消沈して節操もなくなり、祈祷師を頼むようになる。祈祷師が危篤を告げると、天命に身を委ね、ただ手をこまねいて死を待つのみとなる。さもなくば、本来なら百歳の寿命を天から授かり、その身は大切な宝であるのに、下手な医者に身を任せてしまう。ああ、ああ、その身は死んで、心も消え、変わり果てた姿となって黄泉の国をさ迷い、ただ泣きわめくばかりとなる。世を挙げて名利に迷い、本来の自己を悟ることもなく、命を粗末にするのは痛ましい限りである。このように命を軽んずる生き方をして、何で栄耀栄華など口にできようか。しかも進んでは人を愛し人を知ることでもできず、退いては我が身を愛し己を知

ることもできない。ひとたび災禍に遭遇すれば、身は窮地に陥って、朦朧として魂が抜けたようになってしまう。大切な身のことを忘れて、ただ物欲に走れば、危ういこと薄氷を踏むのと同じで、こんな結果を招くのである。

もともと私の一族は数が多く、以前は二百人余りいた。建安紀年以来、まだ十年にもならないのに、死亡する者は三分の二、その内傷寒で亡くなったのは七割に及ぶ。私は昔なじみを喪^{うしな}ったことを無念に思い、若死にした者を救えなかったことに心を痛めた。そこで努めて古の教えを求め、博く薬方を吟味して、ここに傷寒卒病論を著した。まだすべての病に対処できる訳ではないが、この論に基づいて病の源に溯って欲しいと思う。諸賢が私の収集した薬方の意味を心を込めて究明するならば、思い当たることが多いであろう。

【栞】

いわゆる伝染病は、人類にとって最も恐るべき疾患であった。親しい者達があつと言う間に感染して屍の山を築くからである。近代医学のエネルギーの大半が病原微生物の発見に注がれたことから、伝染病の解明は世界の医療史の中で常に喫緊の課題であったことが伺われる。今、抗生物質やワクチンが登場して、その危機感は少なくなったものの、新たな新興感染症や薬剤耐性の再興感染症などの脅威がなくなった訳ではない。病原微生物の存在など知る由もない古代においてはどうかであつたろうか？超古代では、伝染病は悪霊の祟りや神の怒りと捉えていたようで、その治療は専ら巫祝に頼っていたと思われる。「医」の古字として、「醫」の他に「𢀿^{えい}」が挙げられるが、「𢀿」は“えい”というまじないの声の擬声語であつた。これに巫が付いたのが「𢀿」であるので、医と巫は渾然一体となっていたのである。この医と巫を分けようと考えたのが扁鵲で、彼は「巫を信じて医を信ぜざるものは治すべからず」と断じている。その扁鵲に尊崇の念を抱いていたのが張仲景である。仲景の時代も伝染病が猛威をふるい、10年にも満たないうちに彼の親族3分の2が死亡したが、

そのうち7割が伝染病に因っている。これを巫祝の力に頼らずに、薬物療法で治したいものだと一念発起したのである。ただし自分には扁鵲のような超能力はないので、長年培った経験と古代からの薬方を生かして、こんなふう^うに伝染病を系統的に捉え、それに見合う薬方を取り揃えてみた。これを「傷寒卒病論」として上梓するというのである。そして康平本の序文の十五字詰めは「思過半矣」で終了している。宋本では引き続き「夫天布五行」以下が綴られているが、康平本ではここは十三字詰めである。

古来、宋本の傷寒論の序文に対して疑義を挟む者は多かつた。端的な例を挙げれば、脈診である。後半で、今の医者^{いしや}は人迎^{ひとむかひ}跌陽^{てつやう}の脈を考慮していないと言いながら、本文では人迎脈については一言も触れていない。内経で太陽陽明少陽太陰少陰厥陰各経の病態を知るには、寸口脈と人迎脈の比較は最も重要な脈診である。この事一つをとっても、序文は張仲景の作ではないと考えるのは順当である。中西深齋、桃井桃庵、橘南谿、原元麟、浅田宗伯らがこの立場に立つ。一方、序文の前半は仲景の作であり、後半は後人の注釈であるとする説を唱えたのは、村井琴山や山田正珍（図南）である。山田は『傷寒論集成』で次に示す7つの根拠を挙げている。

- ① 「思過半矣」で既に一篇の結尾を成しているにも拘わらず、別に一段の議論を起こしている。
- ② 「天布五行」以下、文理、体裁ともに別個のものである。
- ③ 前半で越人と称し、後半で扁鵲と称しているのは、一人の口吻とは思えない。
- ④ 後半で、今の医者^{いしや}は経旨を求めず口先ばかりだと謗っているが、それは前半で既に言い尽くされている。仲景が惚けているならともかく、このように二度も同じことを言い重ねるだろうか。
- ⑤ 仲景の論では、五行経絡を説いていないが、後半ではこれを説いている。
- ⑥ 仲景の論では、三部九候明堂闕庭で診察していないが、後半ではこれを説いている。
- ⑦ この論は、往昔の淪喪に感じて立論され、その

真意は前半の文章で終了している。

以上は既に大塚敬節氏が『傷寒論解説』で指摘しているところである。その後、長谷川弥人氏が、宋本の序文に似た文章を『千金方』に見つけだした。即ち宋改を経た『備急千金要方』の序に「張仲景曰當今居世之士曾不留神醫藥」から「何榮勢之云哉」までの文言が載り、ほぼ宋本の序文の前半と似た内容が綴られている。一方同書「治病略例第三」の冒頭に「夫天布五行以植萬類人稟五常以為五臟經絡府俞陰陽會通玄冥幽微變化難極」の文言が載り、これは後半の序文と酷似しているが、ここには「張仲景曰」とはない。このことから長谷川氏も前半と後半を分ける説に賛同している。

さらに最近、松岡尚則氏は以下のような検証をしている。宋改以前の『新雕孫真人千金方』では、前半は『備急千金要方』と同様「張仲景曰」とあるが、「理病第三」の冒頭には「方論曰夫天布五行以植萬類人稟五常以為五臟・・・」とあり、「方論曰」と出典を明らかにしている。「方論」とはまだどんな書物か特定できないが、これは書名ではなく、単に処方論集という意味で使われた可能性も松岡氏は指摘している。

このような先人の疑義に、康平本ははっきり答えていたのである。以前筆者は、中国の冉雪峰氏（1877～1963）が著した『冉注傷寒論』に「康平古本」の文字を発見した。その序文の解説文には、中西惟忠（深斎）や丹波元簡、山田宗俊（正珍）の名も登場する。ここには次のような内容も記述されていた。

「筆者が五十年前、傷寒論の序文を読んだとき、大いに疑問を抱いた。ところが最近、康平傷寒論という古本を得て、種々の疑問が氷解した。この本には考証学的価値がある」と。

安易な解釈に満足せず、五十年間疑問を持ち続けたということに、解らないものは解らないとする真摯な姿勢を感じるとともに、筆者はこれに力を得て、昭和60年日本東洋医学会学術総会に於いて「康平傷寒論の研究（一）不知為不知」と題して発表するに至ったのである。

【参考文献】

- ・小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『万葉集』小学館
- ・平田俊春著『最新歴史年表』朋友出版
- ・大塚敬節著『傷寒論解説』創元社
- ・大塚敬節校注『康平傷寒論全』日本漢方協会
- ・『医心方』広島東洋古典医学研究会
- ・中國醫藥叢書『仲景全書』集文書局
- ・『医統正脈全書』新文豊出版公司
- ・清陳世傑本『金匱玉函經』燎原
- ・長沢元夫著『康治本傷寒論の研究』健友館
- ・『貞元傷寒論』出版科学総合研究所
- ・冉雪峰著『冉注傷寒論』科学技術出版社
- ・東洋医学善本叢書『元版千金翼方』オリエント出版社
- ・新釈漢文大系『史記』明治書院
- ・諸橋轍次著『大漢和辭典』大修館書店
- ・近世漢方医学書集成74、75『山田正珍』名著出版
- ・近世漢方医学書集成『村井琴山』名著出版
- ・長谷川弥人「傷寒論解説（3）」日本短波放送放送内容集、1992
- ・東洋医学善本叢書『備急千金要方』オリエント出版社
- ・東洋医学善本叢書『新雕孫真人千金方』オリエント出版社
- ・松岡尚則「『千金方』からみた『傷寒論』序文と山田図南の考察」漢方の臨床・第59巻・第12号、2012
- ・大友一夫「康平傷寒論発掘」漢方の臨床・第40巻・第3号、1993